

まいらいふ

東広島市 大竹 保行

私は、28歳のときC4の頸髄損傷になった。広島カープが優勝した1984年の秋の事である。飲酒運転で自損の交通事故を起こした事が人生最大の失敗となった。他人を巻き込まなかったのが唯一の救いであろう。それまでには数々の失敗をしてきたが、ここでは触れずにおく。

1年半の入院生活を経て自宅で母親の介護による療養生活が始まった。当時は訪問看護やヘルパー制度はなく、母の負担は相当なものであっただろう。生きる希望を失い外出もほとんどなく、一日のほとんどをベッド上で過ごした。無口になり、親戚や母の友人が来てても話をしないという、いじけた生活を送っていた。徐々に友人とも疎遠になっていった。

転機は1995年の39歳のときである。肺炎で入院した病院で、訪問看護の制度を知り、受け入れることにした。1週間に1回の訪問であったが、色々な情報が入ってくる。はがき通信を知り、浜松での懇親会に参加した。目からウロコであった。大竹さんはなぜ電動車いすに乗らないのか？と問われた。夜は大勢で繁華街に出かけてお酒を飲んだ。今では普通に電動車椅子に乗り食事や飲みに行くが、当時は顎で操作する電動車椅子なんて乗れないものと思っていたし、人の多い所には迷惑がかかるので行ってはいけないと思っていた。

2001年には一人暮らしを始め、翌年には広島頸損ネットワークの会長になった。NPO 法人生活支援センターまいらいふを設立し理事長となる。「長」が2つも付くと、県や市の委員や大学やサークルでの講演など色々な依頼が舞い込んでくる。全国頸髄損傷連合会にも入会し、各地で行われる総会に参加した。忙しかったが、充実した日々であった。

2011年から水彩画や日本の世界遺産を巡る旅を始めた。諸々の依頼はほとんど受けず、後輩に譲った。作品でカレンダーを作ってお世話になった人達に配っている。

受傷から34年62歳になった今、こうして過去を振り返ってみると、心臓弁膜症や腹部大動脈瘤など6度の手術を受けたり、つらい事も多々あったが、チャンスも多々あった。自分でつかみ取ったものはほとんどないが、巡ってくるチャンスを逃さなかった気がする。結婚には恵まれなかったが、一夫多妻（ヘルパー）を楽しんでいる。受傷時に精子を冷凍保存しておけばと悔いる。違った人生を歩んでいたかも？

最後に、後輩の皆様へ提言として、次の言葉を送りたい。「チャンスは必ずくる。物にするか否かは貴方次第です。」ずいぶんと偉そうになってしまったが、ご容赦下さい。



水彩画制作風景



白川郷の水彩画